

地域に浸透し得るアートプロジェクト成功事例の勉強会

政策・メディア研究科後期博士課程2年 田島悠史

■概要

この勉強会は、2010年12月1日から2011年3月10日にかけて、地域にアートが浸透するためには何が必要かを見極めるきっかけを掴み、近年多発している地域系アートイベントの実践に役立てることを目的として行われた。具体的には、フィールドワークとオンライン、オフラインの勉強会を通して行われた。

■詳細

この勉強会は、「場所とメディア技術を用いた視覚表現の勉強会」「地域におけるアートと相互作用に関する勉強会」という二つの勉強会を受け継ぐ形で行われた。今回の勉強会の体制も、それまでの勉強会の体制をほぼ受け継いでいる。具体的には、「メーリングリストによるディスカッション」により日々の問題提起を発見しつつ、「現実空間での勉強会」を行い、本課題を深めていった。特に今回はフィールドワークを複数回行うことができ、非常に有意義な勉強会となった。

今回の特色として、フィールドワークを通して成功事例のストックを学んだことにある。具体的なフィールドワークの箇所として、まずは兵庫県神戸市、京都府京都市が挙げられる(1月)。神戸市はアートイベント「神戸ビエンナーレ」が2年に一回開催される土地であり、今回は「神戸ビエンナーレ2011」の開催に伴って見学した。「神戸ビエンナーレ」は地域に根ざしたアートイベントの中では現時点では特に成功している事例と言ってよい[1]。京都は、野外のアートイベントの事例として、

アートと駅および鉄道の試みを行っている京福電鉄嵐山線のフィールドワークを行った。嵐山線では、各駅に芸術作品を展示しているのだが、その一つ一つが連続する物語の一枚一枚になっており、全ての駅の作品を鑑賞してはじめて物語を楽しむことができる構造になっていた。



画像1,2：嵐電各駅美術館

次に、茨城県ひたちなか市が挙げられる(1月)。この訪問は、私がプロジェクトの一員として深く関わっている「みなとメディアミュージアム2010」[2]の報告会を兼ねており、市民と学生が一緒となり、非常に活性化した議論が生まれた[3]。



図3.MMM2010報告会

また、地域でのアートイベントの拠点として、静岡県静岡市のCCC[4]の見学も併せて行った（3月）。CCCは廃校になった学校を改装して使っている施設である。アートイベントを行う地域は過疎や少子化の影響により、廃校になる小中学校が多い（茨城県ひたちなか市にも存在する）。CCCのような活用事例を見ることができるのは成功事例を学ぶ上では非常に有意義であると言えるだろう。



図4.CCC

■今後の展望

今後の展望は勉強会終了時点では、同じような勉強会の継続を考えていた。しかし、2011年3月11日に発生した東北関東大震災によって、状況は完全に変わってしまった。本勉強会と密接な繋がりを持っている茨城県ひたちなか市は震源地からも近く、被害が甚大であった。関連団体である「みなとメディアミュージアム」も、来年度の活動方針を大きく変えた。今後は、単純に「地域」と「アート」について考える

のみならず、「被災地」と「アート」というテーマを考えるべきであると考えている。一般的に「余暇活動」と捉えられることの多い芸術は、被災地においては不要のものと誤解されやすい。しかし、その一方でアートが被災地で何らかの役割を担ったという事例は決して少なくない。例えば阪神大震災において、失われたコミュニティを取り戻すために行われた「コミュニティ&アート計画」において、アートの力が使われた、という報告もある[5]。今回の東北関東大震災においても、自粛とは異なる形で、アートが被災地にどのような役割を担うことができるかどうか、考えていく必要があるだろう。

■謝辞

今回の勉強会は2010年湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」の支援によって行われた。

■参考文献

- [1]大森正夫「神戸ビエンナーレの理念と実践 -地域性に基づいたアートプロジェクトの計画と意義」環境芸術学会論文集(9),2010.3,環境芸術学会
- [2]田島悠史、小川克彦「地域系アートイベントにおけるコミュニティ内でのtwitterの効用「みなとメディアミュージアム」を事例として」地域活性研究vol.2,2011.3,地域活性学会
- [3]「MMM2010報告会ライブツイートまとめ」<http://togetter.com/li/87523>
- [4]CCC -the center for creative communications <http://www.c-c-c.or.jp/>
- [5]深瀬鋭一郎「災害、ガバナンス、そして芸術」現代思想2006.vol.34-1 青土社